

# 「レジャー白書2013」発表

## やや盛り返して 19兆円台

公益財団法人日本生産性本部は8月2日、「レジャー白書2013」を発表した。2012年のわが国は、依然として東日本大震災と原発事故からの復興に課題を残す一方、政権交代があり、大胆な金融緩和による不況からの脱却が期待される中で、レジャー市場にも新たな変化が予感された。一方、パチンコ・パチスロの市場規模は前年の18兆円台から0.9%盛り返して19兆円台に戻ったが、参加人口は前年より12%近い150万人減の1110万人となった。

## 参加人口は150万人減少



### 余暇活動の参加人口 「国内観光」が首位 新名所やLCCで

調査対象91種目のうち、「国内観光旅行（避暑、避寒、温泉など）」が5670万人で2年連続の首位。しかもほとんどの種目が参加人口を減らす中で、90万人増やした。東京スカイツリーなど新名所が続々誕生し、複数のLCC（格安航空会社）が就航して観光の移動手段が充実してきたことなどが好調の一因と見られる。「ドライブ」「外食」「映画」「音楽鑑賞」も前年と同様に5位までを占めた。ほかに20位以内では、「遊園地」が参加人口を110万人増やし、前年の21位から19位に入ったのが目立った。

前年33位の「パチンコ・パチスロ」はやや後退した35位で、参加人口は150万人（11・9%）減少した。（表1）

### 余暇市場の動向

## スポーツがプラス 用品は軒並み増加

2012年の余暇市場は64兆7272億円で、前年（64兆9410億円）の0・3%減とほぼ横ばいだった。

部門別に見ると、スポーツ部門は3兆9150億円で前年比0・6%のプラス。5年ぶりのプラスだった。中でもスポーツ用品は軒並み増加した。トレーニングウェアはファッション性が重視され、アウトドアウェアはエンタリー層が本格機能を求めるようになって、それぞれ買い換え、買い増し需要が拡大している。ゴルフクラブは年々技術が進化してラインアップが拡充している。一方、ゴルフ場は利用者数が伸びたがプレー料金の落ち込みが大きく、マイナスとなった。フィットネスクラブは微増だった。

## 表1 ●余暇活動の参加人口上位10位

2011			2012		
順位	余暇活動種目	万人	順位	余暇活動種目	万人
1	国内観光旅行(避暑、避寒、温泉など)	5,580	1	国内観光旅行(避暑、避寒、温泉など)	5,670
2	外食(日常的なものを除く)	5,370	2	ドライブ	5,200
3	ドライブ	5,360	3	外食(日常的なものは除く)	5,170
4	映画(テレビは除く)	4,160	4	映画(テレビは除く)	4,090
5	音楽鑑賞(CD、レコード、テープ、FMなど)	4,110	5	音楽鑑賞(CD、レコード、テープ、FMなど)	4,000
6	ビデオの鑑賞(レンタルを含む)	3,970	6	カラオケ	3,660
7	カラオケ	3,910	7	動物園、植物園、水族館、博物館	3,650
8	宝くじ	3,840	8	宝くじ	3,530
9	動物園、植物園、水族館、博物館	3,720	9	ビデオの鑑賞(レンタルを含む)	3,420
10	園芸、庭いじり	3,380	10	園芸、庭いじり	3,100
33	パチンコ・パチスロ	1,260	35	パチンコ・パチスロ	1,110

## 表2 ●おもな余暇市場の推移

(単位：億円) (%)

調査年		2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	伸び率
スポーツ	ゴルフ用品	4,370	4,400	4,390	4,240	4,000	3,590	3,550	3,340	3,370	0.9
	スキー・スノーボード用品	1,910	1,860	1,800	1,760	1,680	1,570	1,510	1,470	1,480	0.7
	ゴルフ場	11,220	10,500	10,420	10,770	10,550	10,000	9,650	9,220	9,110	-1.2
	ボウリング場	1,070	1,040	1,020	1,010	910	830	820	760	750	-1.3
	フィットネスクラブ	3,800	4,020	4,270	4,220	4,160	4,090	4,140	4,090	4,120	0.7
	スポーツ観戦料	1,360	1,340	1,340	1,390	1,350	1,450	1,390	1,320	1,360	3.0
趣味・創作	趣味・創作用品	16,200	15,050	14,870	15,070	14,510	14,090	14,060	12,470	12,690	1.8
	鑑賞レジャー用品	38,010	35,880	35,300	33,320	33,940	31,370	38,750	27,860	18,940	-32.0
	学習レジャーサービス	10,670	9,780	9,790	9,910	9,710	9,200	8,730	8,130	8,020	-1.4
	映画	2,110	1,980	2,030	1,980	1,950	2,060	2,210	1,810	1,950	7.7
娯楽	パチンコ・パチスロ	294,860	287,490	274,550	229,800	217,160	210,650	193,800	188,960	190,660	0.9
	ゲームセンター	5,960	6,260	6,580	6,780	5,950	5,150	4,760	4,660	4,600	-1.3
	テレビゲーム・ゲームソフト	4,360	4,970	6,800	7,110	6,580	5,590	5,320	5,020	4,870	-3.0
	中央競馬	29,310	28,950	28,230	27,590	27,560	25,980	24,280	22,940	23,950	4.4
	宝くじ	10,740	11,050	10,940	10,440	10,420	9,880	9,200	10,040	9,140	-9.0
	外食	120,740	121,570	124,080	127,510	128,440	126,080	127,000	123,830	125,070	1.0
	カラオケボックス(ルーム)	4,110	4,210	4,360	4,270	4,210	3,850	3,790	3,850	3,912	1.6
観光	遊園地・レジャーランド	6,320	6,300	6,480	6,430	6,400	6,230	5,990	5,850	6,550	12.0
	国内航空	3,670	3,760	4,150	4,250	4,180	3,770	3,850	3,740	3,970	6.1
	旅館	19,790	19,700	19,110	18,730	17,610	15,850	14,570	14,250	13,990	-1.8
	ホテル	10,230	10,410	10,720	10,930	10,380	9,760	9,760	9,490	9,790	3.2
	旅行業(手数料収入)	6,700	6,920	7,070	7,250	6,850	6,660	6,520	6,230	6,770	8.7
	海外旅行(国際線収入)	8,630	9,080	9,770	10,570	10,630	6,410	7,050	6,510	6,990	7.4
余暇市場合計		812,720	801,170	791,750	745,980	726,880	694,580	679,870	649,410	647,272	-0.3

## 2大特需が終わり 家電関連落ち込む

趣味・創作部門は8兆4220億円で前年比10・2%の大幅なマイナス。とくにテレビ、ビデオレコーダー・プレーヤーは、家電エコポイント終了と地上デジタル放送への完全移行という2大特需が終わった反動で大きく落ち込んだ。一方でカメラはノンフレックス（ミラーレス一眼）の競合が出そろい急成長した。CD、映画も増えた。逆にビデオソフト、音楽配信は減少した。書籍はベストセラーが1点しか出ず、雑誌離れも一

段と進んだ。

娯楽部門は42兆7572億円で前年比0・7%のプラス。テレビゲーム・ゲームソフトは、ゲーム機の販売台数が大きく落ちたことなどから減少した。ソーシャルゲームの市場規模は、コンパガチャ問題と自主規制が話題となった後も落ちていない。公営競技（競馬競輪、競艇等）の売上は増加したが、一昨年の水準には戻っていない。外食、カラオケボックスは若干の増加を見せた。

## 観光・行楽が伸びる 20年ぶりの4%台

国民のレジャー活動を需給両面から総合的に分析する我が国唯一の出版物。1977年に創刊され、今号で通算37号となる。全国15〜79歳男女を対象に、今年1月時点でインターネット調査を行い、有効回答3334を得た。91種類の余暇活動をスポーツ（28種目）、趣味・創作（30種目）、娯楽（21種目）、観光・行楽（12種目）の4部門に分類し調査した。

用語のうち「参加率」とは、ある余暇活動を1年間に1回以上行った人（回答者）の割合。「参加人口」とは、ある余暇活動を1年間に1回以上行った人口（全国）で、2013年1月現在の15〜79歳人口（総務省統計局推計）と参加率を掛け合わせて推計した。

観光・行

楽部門は9兆6330億円と前年比4・5%のプラスで、1991年以来の4%台の伸びとなった。

新車販売が、新エコカー減税と

エコカー補助金の導入効果もあって急回復した。遊園地・テーマパークは過去最高水準の売上げだった。東京スカイツリーのオープンも大きな話題となった。

## パチンコ・パチスロの動向

### 1110万人台に 若者層の離反顕著

パチンコ・パチスロは、昨年の白書で市場規模（貸玉・貸メダ料）が前年比2・5%マイナスの18兆円台に落ちた上、参加人口も約25%マイナスの激減で業界関係者が受けた衝撃は記憶に新しい。

今回の白書では、市場規模は前年比0・9%プラスの19兆660億円となり、19兆円台に辛うじて戻った。

これは東日本大震災と計画停電等による営業停止で落ち込んだ前年からの反動のほかに、パチスロ営業の好調が影響している。

しかし、参加人口は前述の通り、150万人減の1110万人となった。複雑なゲーム性についていけず、高齢者層に次いで若者層の離反も顕著になってきた。ヘビィユーザー対象のマニアックな遊技

海外旅行は円高が追い風となつて、出国者数が史上最高を記録した。日系LCC（格安航空会社）が相次いで就航し注目を集めた。

（表2）

機による営業スタイルは限界と見られる。

### 止まらぬ参加率減 1回あたり費用増

参加率は1998年（平成10）以降10%台にあり、しかもゆるやかに下がり続けているが、今回も10・9%と前年比1・4%減少した。年間平均活動回数も27・4回と前年を0・4回下回った。

一方、年間平均費用は9万7100円と前年を3400円、1回当たりの費用は3540円と同170円それぞれ上回った。ホール経営は二極化が進み、中小は苦戦しているが大手の収支は悪くない。ただし、新規出店は大手に限られ、全国的に見ると遊技場数は17年連

### 表3●パチンコ・パチスロの参加及び市場動向

調査年	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
参加率 (%)	15.9	16.3	15.5	15.0	13.1	14.3	16.8	16.3	12.3	10.9
年間平均活動回数	26.8	27.5	23.6	28.1	25.6	29.6	20.4	19.9	27.8	27.4
参加人口 (万人)	1,740	1,790	1,710	1,660	1,450	1,580	1,720	1,670	1,260	1,110
ホール事業所数	16,076	15,617	15,165	14,674	13,585	12,937	12,652	12,479	12,323	12,149
パチンコ台数 (万台)	323	308	296	293	295	308	316	316	311	304
パチスロ台数 (万台)	166	189	194	200	164	145	135	139	147	155
1ホール当たり設置台数	304	318	323	336	338	350	356	365	372	377
市場規模 (億円)	296,340	294,860	287,490	274,550	229,800	217,160	210,650	193,800	188,960	190,660
対前年伸び率 (%)	1.4	-0.5	-2.5	-4.5	-15.5	-5.5	-3.0	-8.0	-2.5	0.9

出典：「警察庁風営白書」「レジャー白書」各年版

### 表4●パチンコ・パチスロの性・年代別参加率の推移

(単位：%)

調査年	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
全体	15.9	16.3	15.5	15.0	13.1	14.3	16.8	16.3	12.3	10.9
男性全体	24.4	24.8	23.3	22.8	19.6	22.0	22.9	22.8	17.0	16.9
10代	6.0	9.6	13.0	9.0	3.7	4.3	11.4	7.5	8.3	2.0
20代	31.2	32.0	33.5	35.1	23.0	34.4	24.5	26.9	17.1	18.1
30代	35.0	29.8	28.4	28.6	30.3	30.6	27.5	24.7	25.9	20.0
40代	27.9	24.5	27.8	19.1	21.3	25.0	27.1	27.5	21.6	23.1
50代	23.8	31.4	25.9	29.1	23.4	23.4	22.9	28.9	14.9	17.5
60代以上	16.5	16.3	11.9	13.4	11.4	11.6	19.4	16.5	12.6	60年代 15.1 70年代 10.7
女性全体	7.9	8.3	8.2	7.6	6.9	7.0	11.1	10.2	7.7	5.1

出典：「レジャー白書」各年版 (注) 性・年代別の各集団における参加率であり、合計しても100%にはならない。

続で減少している。(表3)

参加率を性・年代別に見ると、男性は全体で16・9%と前年比0・1%の微減だった。男性の参加率は2008年以降ゆるやかに減り続けている。とくに、入門人口とも呼べる20代は、2010年までは20%台の後半にいたが、前年いきなり17%に落ち、今回も18・1%だった。30代も6%近く減った。40、50代は2・3%伸びた。前年12・6%だった60代以上は、今回60代、70代に分けて集計したところ、60代で15・1%、70代10・7%という数字が出た。女性全体では5・1%と過去20年で最低を記録した。(表4)

## パチスロも低貸しへ 下がる正社員比率

低貸営業はパチンコの場合、全台数の35〜40%に拡大し、この流れはパチスロにも及んでいるが、必ずしも売上げに貢献しているとはいえない。

団塊の世代を中心に、離反したファンを取り戻すため、昔の羽根物を導入するなどの動きが見える。収支悪化に伴い、正社員をパー

トやアルバイトに切り替え、正社員比率が半数を下回る店舗が増えたが、ゴト被害につながる恐れもあり、パート、アルバイト教育が重要となっている。

昨今は、ホールの現場では店内環境を改善することで集客につなげようとする動きが顕著になっている。レストランを併設し、立ち寄り客を増やそうとするなどの試みが出てきている。地域社会とのつながりを意識し、地元自治体と

協定を結んで一時避難所として店舗を開放しようとするところもある。

パチンコ・パチスロ営業に行き詰まりを感じ、カジノ法制化にビジネスチャンスを見出そうとする経営者が増えている。カジノ法制化に伴い、業界を取り巻く環境はますます複雑になり、変化も激しくなると予想される。業界団体や組織の連携と協働が必要な時期にきている。

特別  
レポート

やめる理由・始める理由  
「費用が負担」のパチンコ

今回の白書では、「やめる理由・始める理由——余暇活性化への道筋」と題する特別レポートがまとめられた。

この中で、最近5年以内にやめた余暇活動のうち1つを選んで、やめた理由を聞いたところ、「年齢・健康・体力の衰え」「家事・育児で忙しくなった」等の項目がある中で、パチンコ・パチスロは「費用が負担できなくなった」の項目で回答率が78%と一番高かった。

「誘われる」のがきっかけ

一方で、余暇活動を開始・再開した理由に「以前やっていたから」「世間の流行だから」等の項目がある中で、パチンコ・パチスロは「周囲の人がやっているから」の項目での回答率が50%と、ツイッター等のデジタルコミュニケーションに次いで高く、未経験者、休止者がホールに足を向けるには、友人等から誘われるなどのきっかけ

60代以上が  
余暇の主役

余暇全体で過去10年間の参加状況の変化を調べたところ、1人当たりの余暇参加種目数が減少傾向にある中で60代以上の参加種目が増え、余暇の主役になって

いることがわかった。男性の場合、2002年では10代の15.7種目が一番多く、右肩下がりで60代以上が10.2種目と一番低い。06年以降も右肩下がりが顕著になっているが傾きがなくなり、12年は60代以上が最も種目が多い右肩上がり

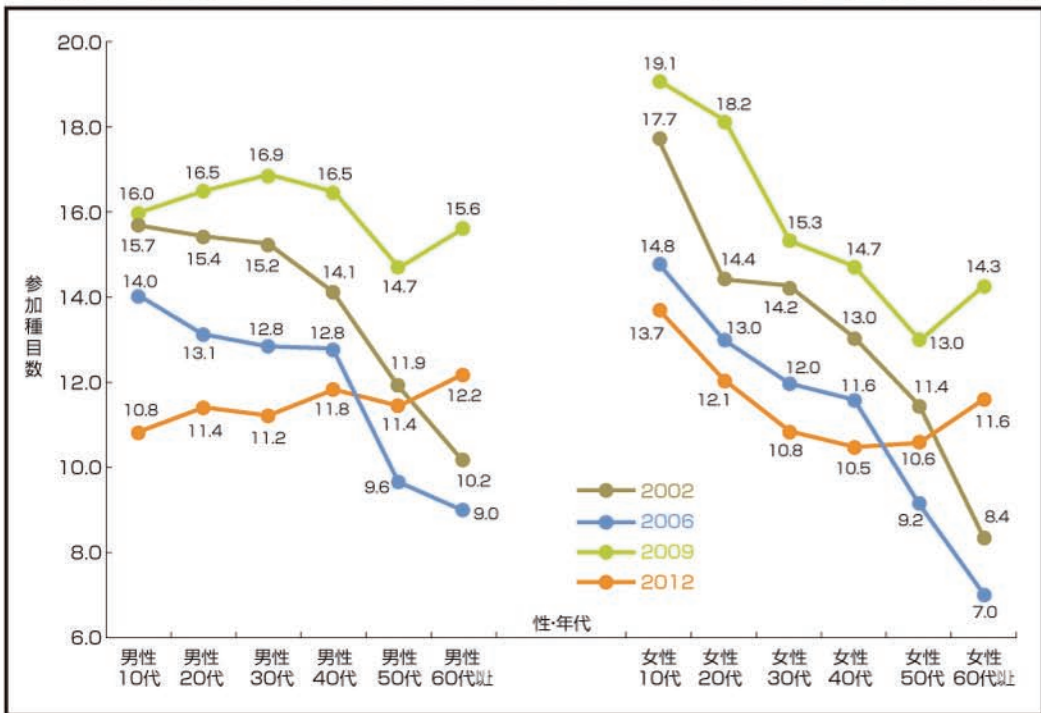


表5●性・年代別に見た余暇の参加種目数の推移

女性の場合、02、06、09、12年を通して10代が最も多い状況は変わらないが、09年では50代、12年では40代でそれぞれ底を打ち、60代以上で上昇するU字曲線になっている。(表5)